

短期大学における初年次教育の実践

—初等教育科「基礎演習」の実践をとおして—

阿部 敬信 山村 靖彦 高濱 正文

An Experience of First-Year Education at Junior College
—Based on “Fundamental Seminar” in the Department of Childhood Education—

Takanobu ABE Yasuhiko YAMAMURA Masafumi TAKAHAMA

【要 旨】

本学初等教育科では初年次教育として平成23年度新規開講科目に「基礎演習(幼児教育)」を開講した。初年次教育である「基礎演習」は短期大学における2年間の在学期間で、高度な資格取得のための専門的職業教育を行うための能動的で自律的な学習態度への転換を図る基盤となる科目である。本稿では、「基礎演習」の実践について報告するとともに、その教育効果について最終回の授業で用いたワークシートの記述から操作的定義によるカテゴリーによる度数の分析によって検証を行った。その結果、「基礎演習」の「到達目標」は達成されたと考えられた。初年次教育である「基礎演習」の充実を図るために、今後も定量的な検証や「基礎演習」担当教員に対する調査などから実施に係る課題などを検討する必要があるだろう。

【キーワード】

初年次教育、短期大学、スタディスキル、ソーシャルスキル

1. 短期大学における初年次教育

我が国においては、急速な少子高齢化社会への移行により、高等学校卒業生数の減少が進んでおり、大学をはじめとする高等教育の入学者を巡る状況は厳しさを増す一方である。このことにより、これまでは大学や短期大学に入学しなかった層が、大量に大学へ進学するようになったことや、核家族化の進行による家庭教育や地域共同体の消失による地域の教育力の変

容などの要因から、大学での教育に適応できない学生が増加しているといわれている。そのため、学生の大学教育への適応不全への包括的な対応として大学入学後の最初の1年間の教育に実施される「初年次教育(First-Year Experience)」がほぼすべての大学で導入されるという状況になっている¹⁾。

「初年次教育」という概念を巡っては、我が国においては開始された当初から様々な変遷を経てきているが、友野²⁾によれば現在では概ね次のように整理されている。

- ① 学生生活や学習習慣などの自己管理能力をつくる(レポートやノートの提出等を通じて)
- ② 高等学校教育までに習得しておくべき不足分を補習する(リメディアル教育等を通じて)
- ③ 大学という教育の場を理解する(オリエンテーション、自校教育等を通じて)
- ④ 人としての守るべき規範を理解させる(オリエンテーション、講義・演習等を通じて)
- ⑤ 大学における新たな人間関係を構築する(グループ学習、合宿等を通じて)
- ⑥ レポートの書き方、文献探索方法など、大学で学ぶためのスタディスキルやアカデミックスキルを獲得する(講義・演習等を通じて)
- ⑦ クリティカルシンキング、コミュニケーション力など大学で学ぶための思考方法を身に付ける(講義・演習等を通じて)
- ⑧ 高等学校教育までの受動的な学習から、能動的で自律的な学習態度への転換を図る(講義・演習等を通じて)

2008年に出された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」³⁾においては「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」として、その重要性が指摘され、各大学が取り組むべきこととして「学びの動機付けや習慣形成に向けて初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける」と、学士課程教育の中での位置づけまでも答申されている。

2001年に私学高等研究所が私立大学全学部を対象に行った「私立大学における一年次教育に関する調査」⁴⁾によれば、初年次教育の実施率は、80.9%にも達している。その後、2007年に国公私立4年制大学の全学部を対象に国立教育政策研究所が行った包括的な質問紙調査である「大学における初年次教育に関する調査」⁵⁾では、スタディスキル系の初年次教育の実施率は、90.2%に及んでいる⁶⁾。このような状況の中で、4年制大学では、主には教養教育を司る部門によって初年次教育の実践がさまざまに展

開されるとともにその効果について検証が行われている。

しかし、これはすべて4年制大学を対象としたものが主であり、すくなくとも入学者を巡る状況においては高等教育を同じように担う教育機関として短期大学も同様であるか、むしろより厳しい状況にあると考えられるにもかかわらず、初年次教育の実施率の調査すら、皆無に近い状況である。

これは、短期大学においては基本的な在学期間が2年間と4年制大学の半分という短い期間の中で、高度な資格取得のための専門的職業教育を行うことが多いため、カリキュラム上の制約が厳しいことから、初年次教育を新たに導入することにためらってしまうことが大きな要因として想定されてきた。

ところが、九州地区の保育士養成校に対する初年次教育に関する調査をした仲嶺ら⁷⁾によれば、何らかの初年次教育を行っている保育士養成校は100%であり、「初年次教育に係る特定の講義・演習」を設定している保育士養成校は8割となっていることが分かっている。調査対象校となった保育士養成校の大部分が短期大学であることを考えると相当数の短期大学が実施していると考えられる。また、短期大学における初年次教育にかかる実践報告や研究論文も見られるようになってきた^{8)~12)}。

例えば、九州北部の九つの短期大学においては、「短期大学コンソーシアム九州」が結成され、共同で「初年次教育」の実態調査や研究開発がなされている¹³⁾。また、鹿児島県においては、鹿児島県内の12大学・短期大学・高等専門学校が共同で初年次教育「かごしまカレッジ教育」を開発・実施し、短期大学も入った共同による初年次教育を行うなどの現状もある¹⁴⁾。

2. 初等教育科における「基礎演習」の実施

(1) 「基礎演習」のコンセプト

このような状況を踏まえ、本学初等教育科においても平成23年度前期において「基礎演習(幼

児教育)」という必修1単位の演習科目を開講することになった(以下、「基礎演習」とする)。それは、近年の学生の国語の読み書き能力の低下や保育者・教師として大切な人間関係形成能力の低下、学生の規範意識やマナーの低下が、関係者より経験的に語られることが多くなったことが直接の契機としてある。また、GPAの導入による客観的な評価システムにより単位認定の厳格化が図られていることもある。

学科内におけるカリキュラム検討委員会や教務委員による協議を踏まえ、学科会議によって新規開講科目としての基礎演習のコンセプトが、次のように決定され、短期大学における初年次教育として開講されることになった。

◆ 「基礎演習」のコンセプト

短期大学での学習は、高等学校までの受動的な学習と異なり、自らが課題を見つけ、課題を解決していく能動的で自律的な学習が必要となる。本演習では、このような学習に必要なスタディスキルであるノートテイキング、文章の要約方法、レポートの書き方や、新しい人間関係を形成するために必要なソーシャルスキルであるコミュニケーション力、表現力を、グループワークによる幼児教育に係る諸課題に取り組む演習を通して習得することを目指す。

つまり、本学初等教育科の「基礎演習」においては、短期大学での学習に必要なスタディスキルと短期大学での生活に必要なソーシャルスキルを習得させることで、専門教育での学習に活用させることを目指すことになる。その方法としては、主に少人数によるグループワークによる協同学習を用いた課題解決学習を指向することになる。

(2) 「基礎演習」の目標と実施に係る基本的な考え方

このコンセプトに基づき、シラバスとそれぞれの回の授業計画を作成する上での到達目標と基本的考え方を次のとおりとした。これらの到達目標や基本的考え方を設定するに当たっては、橋本ら¹⁵⁾、佐藤ら¹⁶⁾及び佐藤¹⁷⁾を参考にし

た。

◆ 到達目標

- 短期大学での学習に必要なとされるスタディスキルを習得し、専門教育での学習に活用することができる。
- 短期大学での生活に必要なとされるソーシャルスキルを習得し、好ましい人間関係を形成するために活用することができる。
- グループで協調して、課題を解決することができる。

◆ 基本的考え方

- ① 講義はできるだけ少なくし、演習を中心とした学習内容とする。

学習の基礎スキル(スタディスキル&ソーシャルスキル)の習得を目的としていることから、講義はできる限り少なくして、学生が実際に活動することによって習得するための演習を重視する。そして、それを自己評価する時間を十分に確保する。また、基礎スキルを定着させるために、授業実施期間中に、そのスキルを複数回設定する。

- ② 学習者の文脈に合わせる。

学習の基礎スキルだけを取り出しても、定着は困難と言われている。学習者の文脈に合わせて扱う教材や課題を選定することから、保育や幼稚園、小学校教育に係る教材や課題を取り扱う。

- ③ 目標を明確にする。

学習の基礎スキルを学ぶ必要性を確認し、体験することが目標となってしまう「楽しかった」レベルで授業を終わらせないために、毎回の授業の冒頭で必ず学習目標を提示・確認し、授業の見通しをもたせる。

- ④ 振り返りの機会をつくる。

学習の基礎スキルを定着させるために、授業の冒頭で示した学習目標に応じて、何が理解できて、何が理解できなかったかを自覚するために、振り返りシートの記入など毎回の授業の終了前の10分程度を振り返

りの時間として確保する。

- ⑤ 学習規律を徹底させ、授業時間外学習を促進させる。

遅刻（5分までを除く）・途中退室（やむを得ない事情を除く）・欠席（欠席届を事前に提出した場合は除く）及び授業中の私語・携帯・飲食を厳禁とし、違反者に対しては即時退室を指示することで、学習規律の厳守を徹底し、宿題を課すことで授業時間外学習を促進させる。

- ⑥ 以上を実現させるために、資料などとともに、毎回ワークシートに授業内容を聞き取らせ（ノートテイク）、提出させて、各クラス担当教員が添削をして、次の回に返却する。提出された内容に不備がある場合は再提出させることもある。

（3）「基礎演習」の学習集団

さらに、教育効果を上げるために、学習集団の編制についても少人数による編制を基本原則として、「基礎演習」のための「基礎演習クラス」と呼ぶ学生数18名～19名の学習集団の編制を学科内横断型で行い9クラスを編制し、「基礎演習」担当者を、それぞれの「基礎演習クラス」担当教員として位置づけ、一貫したきめ細かな指導を行えるようにした。

「基礎演習」第1回から第3回までは、学生全員（167名）に対する一斉指導で行い、次の第4回から第6回までは、3グループに分けて指導し、各授業メニューをローテーションすることが行った。第7回から第9回は、5月下旬に実施される初等教育科1年全員を対象とした「コミュニケーション合宿」内での実施とした。第10回から第14回までは各「基礎演習クラス」ごとに分かれて、授業内容は共通として、それぞれ別教室で実施した（ただし、第12回については視聴覚機器設備の都合上、学生全員に対する一斉指導となった）。第15回は、プレゼンテーションの全体発表と最後の振り返りのために学生全員に対する一斉指導を行った。このように少人数の「基礎演習クラス」による展開を原則としながらも、授業の目的や時期に応じた

学習集団の形態となるように柔軟な編制を行った。

「基礎演習クラス」内で、さらに4～5名の学生による学習グループを編制してグループワークを行うようにした。このグループは基礎演習第3回のアイスブレイク「運命共同体」で編制し、残りの回におけるグループワークで同じグループ編制となるように固定した。

（4）「基礎演習」の内容

「到達目標」と「基本的考え方」を基に、全15回の授業を表1に示すようにデザインした。コースデザインにあたっては、橋本ら¹¹⁾、佐藤ら¹²⁾及び佐藤¹³⁾を参考にした。

（5）「基礎演習」の評価

「到達目標」と「基本的考え方」に基づき、原則、毎授業回ごとにワークシートを配付して、授業内容を聞き取らせてワークシートに記述させた（ノートテイク）上で、「基礎演習クラス」担当教員に提出させた。「基礎演習クラス」担当教員は、提出されたワークシートの添削とコメント欄への記入を行い、次の授業回の冒頭に返却した。提出されたワークシートの内容に不備がある場合は再提出させた。

毎授業回で配付された資料とワークシートなどの成果物は、学生にクリアブック等でまとめておくように指示しポートフォリオを作成させて、最終回に提出させた。

「基礎演習」のコンセプトと「到達目標」から、試験などによる評価はなじまないと判断し、表2にあるように学生による成果物による評価を重視した。評価は「基礎演習クラス」担当教員が行った。

表1 各授業回における授業内容と学習集団の形態

授業回	授業内容	学習集団
第1回	・オリエンテーション ・アイスブレイク「パスデイ・リング」 ・大学でのノートのとり方 ・大学の授業～講義と演習の違い	全員一斉
第2回	・日本語能力基礎調査 ^{*1}	全員一斉
第3回	・アイスブレイク「運命共同体」 ・学長講演「別府大学短期大学部とは～建学の精神」	全員一斉
第4回	・敬語の基礎－基本ルールをマスターしよう ^{*2} ・ロールプレイング「敬語を使ってみよう」	3グループ
第5回	・アイスブレイク「アクティブ・リスニング」 ・連絡メモの作成－5W1Hでチェックしよう ^{*2}	3グループ
第6回	・図書館活用法－図書館で資料を探そう ^{*2}	3グループ
第7回	・アイスブレイク「紙芝居をあそぶーへびくのおさんぽ」 ・紙あそび芝居とは ・グループワーク「オリジナル紙芝居に挑戦！その1」 ^{*3}	全員一斉
第8回	・グループワーク「オリジナル紙芝居に挑戦！その2」 ^{*4}	演習クラス
第9回	・グループワーク「オリジナル紙芝居を発表しよう！」 ^{*4}	全員一斉
第10回	・大学におけるレポート作成法 ^{*5}	演習クラス
第11回	・アイデア発散・収束法 ・グループワーク「KJ法－新聞紙の新たな用途」	演習クラス
第12回	・グループワーク「ニュース映像を見て要約文を作成する」 ^{*6}	演習クラス ^{*7}
第13回	・プレゼンテーション作成法 ・グループワーク「プレゼンテーション作成 その1」 ^{*8}	演習クラス
第14回	・グループワーク「プレゼンテーション作成 その2」 ^{*8}	演習クラス
第15回	・プレゼンテーション全体発表会 ^{*9} ・基礎演習全体の振り返り	全員一斉

※1 学生の入学直後での日本語能力の実態把握を目的に行った。「基礎演習」等の指導に生かすとともに学生の目的意識を明確にするために、特定非営利法人「英語運用能力評価協会」が作成・実施している「日本語能力基礎調査」を実施した。

※2 「図書館活用法」の実施において、図書館側の受け入れ人数に制限があるため「基礎演習クラス」9クラスを3グループに分けて、3回分の授業内容をローテーションで実施した。よって、グループによっては授業の順番が異なる。

※3 初等教育科1年全員を対象とした「コミュニケーション合宿」における「基礎演習」第8回及び第9回実施のための事前の準備を行うための演習として設定した。

※4 初等教育科1年全員を対象とした「コミュニケーション合宿」の期間で実施した。

※5 レポートの主題については各「基礎演習クラス」ごとに異なったものとし、授業実施後6日後までのレポート提出を義務づけた。

※6 ニュース映像として日本テレビ系列「NEWS ZERO」が平成23年6月8日に放映した「どうケア？ 子どもたちの心に震災の傷」を使用した。

※7 各「基礎演習クラス」が用いている教室すべてにニュース映像を視聴するための視聴覚機材がないことから、視聴においては学生全員一斉に行った。グループワークは「基礎演習クラス」ごとに行った。

※8 プレゼンテーションの主題については、各「基礎演習クラス」ごとに異なったものとし、学生全員が1年次前期に必修として履修している「保育者論」、「発達心理学」、「保育内容Ⅱ」、「保育内容Ⅳ」から各科目の担当者から聴取して設定した。

※9 グループワークでプレゼンテーションを作成していることから、各「基礎演習クラス」ごとに4本のプレゼンテーションが作成されている。その中から互いに推薦をして、「基礎演習クラス」代表として1本ずつ計9本を全体で発表した。それぞれの主題は※8にあるように異なっていることから互いのクラスで調査した内容を知ることができるようになっている。

表2 評価方法と評価割合

No.	評価方法	評価割合
1	提出物	80%
2	グループワークへの参加態度	10%
3	発表における態度	10%

3. 教育効果

(1) 教育効果を測定するために

「基礎演習」の最終回の授業になる第15回の授業において「基礎演習全体の振り返り」を行った。第1回でも提示した「基礎演習」の「到達目標」を再度提示し、ワークシートにその到達目標を記入させた後に、次の3項目について学生に個人で記入させた。

- ① これまでの基礎演習の授業で、あなたは何を学ぶことができましたか。
- ② 基礎演習の授業を受ける前と、受けた後で、あなたが変わったことは何ですか。
- ③ あなたは、基礎演習の授業で学んだことを、これからの学生生活や将来の生活にどのように生かしていきたいと考えますか。

①は基礎演習で何が理解及び習得ができたのかを認識させ、②は、①で理解や習得できたことにより態度や行動がどのように変化したのかを認識させ、③は、①で理解や習得することによって②で変容した態度や行動を、これからの学習や生活の中でどのように活用していくのかを問うている。

つまり、これらの項目における学生の記述内容から、「基礎演習」が学生にもたらした教育効果を測定できると考えた。

(2) 方法

まず、「基礎演習」第15回で回収したワークシートから、本論文の共著者が「基礎演習クラス」担当教員となっている3クラス分のワークシートを分析対象として抽出した。「基礎演習」第15回出席者148名の内、分析の対象となった者は47名(32.2%)であった。元々「基礎演習クラス」は初等教育科1年のクラスを横断的か

つ均等に編制していることから3クラスを分析対象として代表させることにした。

次に、各質問項目ごとの記述内容を意味のかたまりごとに分割し、各質問項目ごとにカテゴリーを操作的に設定した後、共著者3名で協議を行い分割したかたまりを各カテゴリーに分類した。

①においては、基本的には「基礎演習」で取り上げたスキルや方法をカテゴリーとして設定した。表3に示す。これらの語句があったり、文の意味がこれらの語句を指していたりする場合に、それぞれのカテゴリーに分類した。

表3 スキル・方法のカテゴリー

ノートの取り方
5W1Hのメモ作成法
グループワーク
思考法
アイデア発散・収束法
図書館活用法
敬語の使い方
将来のこと
要約文の作成
プレゼンテーション
基礎知識の理解
レポート作成法
アイスブレイク
大学生活
その他

②においては、①のスキルや方法に加え、スキルや方法を理解・習得した結果の行動変容が見られるカテゴリーとして「コミュニケーション」(主に1対1の場面による意思の相互伝達)、「発表の方法と態度」(主に1対不特定多数の場面による意思の一方的な表明)、「思考法」(考え方やまとめ方)、「将来のこと」(これからの自分のあり方)、「授業への態度」(授業に対する姿勢)を設定した。

③においては、「内容」と「生かす場」の二つのレベルのカテゴリーを設定した。「内容」

については②と同様とした。「生かす場」としては、「将来の生活」（これからの生活全般の中で生かす）、「保育・教育現場」（卒業後の保育・教育現場で生かす）「学校生活」（短大での生活や学習の中で生かす、ただし実習はのぞく）、「実習」（短大での実習で生かす）といったカテゴリーを設定した。

(3) 結果と考察

① これまでの基礎演習の授業で、あなたは何を学ぶことができましたか。

最も多かったカテゴリーは、「グループワーク」の34で、次に「ノートの取り方」が12、「アイデア発散・収束法」が12の順であった。以下、「5W1Hのメモ作成」、「プレゼンテーション」と「基礎演習」で取り上げたスタディスキルが続く。度数が2以下のカテゴリーについては「その他」とした。その結果を図1に示す。

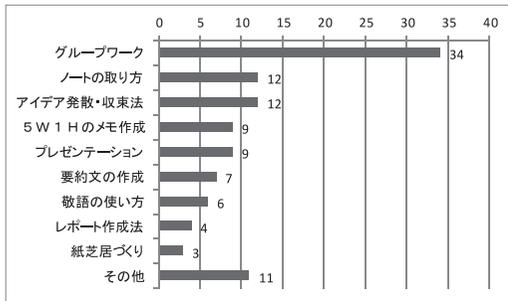


図1 これまでの基礎演習の授業で、あなたは何を学ぶことができましたか

「到達目標」として最後に挙げた目標に最も関連が深い「グループワーク」が最も多かったのは、「基礎演習」が成果を上げているといえる。一つの目標に向かって他者と協同して動くことで、新しい考え方や意見を知ることができ、そのことが自分の視野や知識を豊かなものにしていくことに気付いたという記述が目立った。また、「基礎演習」として取り上げたスタディスキルも度数に多少はあるもの一通り挙げられており、スキルの理解・習得が行われ

ている様子がうかがえる。

② 基礎演習の授業を受ける前と、受けた後で、あなたが変わったことは何ですか。

最も多かったカテゴリーは、「コミュニケーション」と「ノートの取り方」の18で、次に「グループワーク」が13の順であった。以下、「要約文の作成」、「5W1Hのメモ作成」と続く。その結果を図2に示す。

ソーシャルスキルの基本である「コミュニケーション」行動の変化が最も多かった。これは①で「グループワーク」が最も多かったことに関連していると考えられる。「グループワーク」は②においても次に度数が多かった。グループワークを行うことで、コミュニケーションに対する態度や行動が変容したと考えられる。スタディスキル系では、大学生活で用いることが多いと推測される「ノートの取り方」や「要約文の作成」において、「基礎演習」で理解・習得したことを活用している様子が見える。

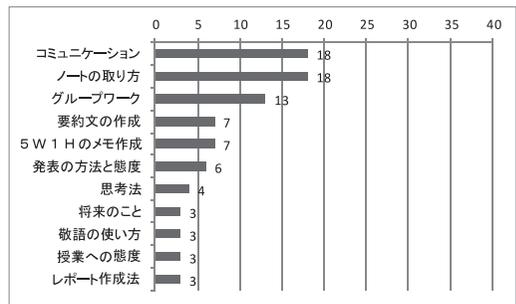


図2 基礎演習の授業を受ける前と、受けた後で、あなたが変わったことは何ですか。

③ あなたは、基礎演習の授業で学んだことを、これからの学生生活や将来の生活にどのように生かしていきたいと考えますか。

「内容」としては、最も多かったカテゴリーは、「グループワーク」が16で、次に「ノートの取り方」が13、「敬語の使い方」が9の順であった。以下、「コミュニケーション」、「5W1Hのメモ作成」と続く。その結果を図3に示す。

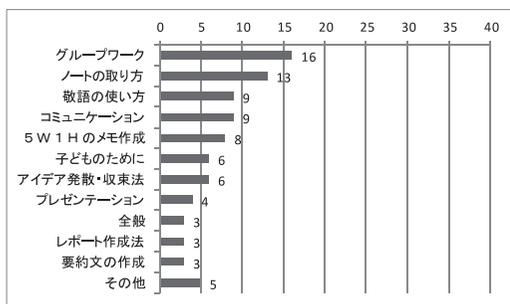


図3 あなたは、基礎演習の授業で学んだことを、これからの学生生活や将来の生活にどのように生かしていきたいと考えますかー「内容」

「生かす場」としては、最も多かったカテゴリーは、「学生生活」の25で、次に「将来の生活」が15、「保育・教育現場」が9の順であった。図4に示す。

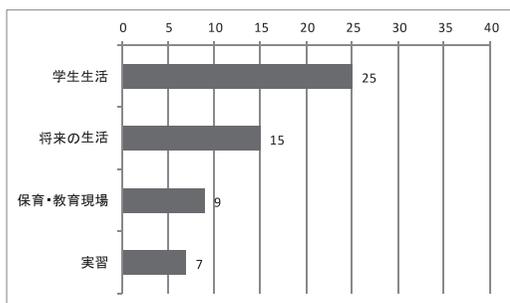


図4 あなたは、基礎演習の授業で学んだことを、これからの学生生活や将来の生活にどのように生かしていきたいと考えますかー「生かす場」

「学生生活」において「グループワーク」といった協同的な活動を生かしていきたいという結果になった。短期大学の学生生活において他者と協同して学ぶことが大切であると気付くことができたといえる。たちまちは学生生活で生かすというのは当然の結果でもあろう。しかし、次に「将来の生活」が挙げられていることから分かるように、卒業後の社会人としての生活においても活用したいという見通しをもつことまで来ている。意外に多かったのは、「実習」である。学生生活の中でも、最初に社会人としての行動が求められることを自覚して

いることの表れかもしれない。

「基礎演習」によって学生が「到達目標」を達成している要因として推測できるのは、「基本的考え方」の①及び②にあるように、グループワークの技法など繰り返し同じスキルを用いていること、そして、③及び④にあるように、毎回の授業の冒頭で目標を明確に示した後に、授業の最後に必ず目標を再度、提示して振り返りを行うことで、理解・習得すべきスキルなどを改めて認識させたこと、さらに、教員のコメントでスキルの定着を促したことなどであろう^{17)・18)}。

4. 学生による授業評価

「基礎演習」第15回の終了後に、本学が「学生による授業改善アンケート」として用いている質問項目を援用して、「これからの基礎演習を改善するためのアンケート」を実施した。評価項目について表4に示す。いずれの評価項目についても、「そう思う：5」から「そう思わない：1」の5件法によって学生が評価を行った。

その結果、「基礎演習」第15回出席者数148名から未回答項目などがある2名をのぞいて、146名の回答を有効回答（有効回答率98.6%）として得ることができた。本稿執筆時点において、短期大学部初等教育科の平成23年度前期授業改善アンケートの結果が示されていないので比較はできないが、参考として各評価項目の平均評定を図5に示しておく。

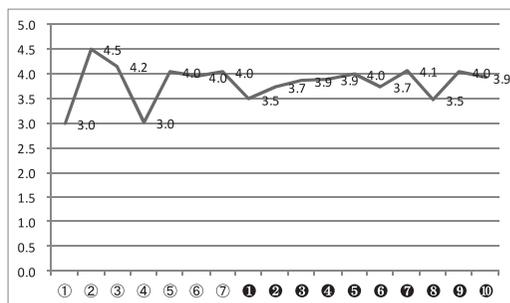


図5 評価項目ごとの平均評定

表4 「これからの基礎演習を改善するためのアンケート」評価項目

1	この授業科目におけるあなた自身のことについて回答してください。
①	シラバス（開講科目解説）をよく読んだ。
②	この授業を休んだり遅刻しないで受講した。
③	授業中に私語、いねわりやメールなどをせずに受講した。
④	授業の内容について、参考文献を読むなど、授業時間外でも勉強した。
⑤	この授業内容の理解に努め、積極的に取り組んだ。
⑥	授業の内容に関心を持ち、知識・技能を深める努力をした。
⑦	総合的に見て、授業内容を理解できた。
2	この授業についてあなたがどのように感じているのか回答してください。
①	シラバスを見てこの授業の教育目標を理解できた。
②	シラバスが示す教育目標を達成できるような授業内容であった。
③	教材（テキスト・配付資料）、教具の利用は適切でわかりやすい授業であった。
④	板書の仕方や視聴覚機器による提示は効果的であった。
⑤	教員の話し方は、明瞭で聞き取りやすかった。
⑥	質問したり、意見が述べられるように配慮がなされていた。
⑦	教員の授業に対する熱意が感じられた。
⑧	教員は学びの環境を保つように私語や居眠り、メールなど注意していた。
⑨	教員は授業準備をていねいにし、わかりやすく説明した。
⑩	この授業は充実していて、満足できるものであった。

5. 結論

本学初等教育科における初年次教育の実践として平成23年度新規開講科目「基礎演習」の実践について報告するとともに、実践による教育効果について検証を行った。

履修した学生の内、約1/3の学生が「基礎演習」の最終回で記入したワークシートの振り返りの記述を分析した。それにより、「到達目標」としてあげた3点の目標を達成していることが明らかとなった。また、学生による授業評価アンケートの結果も参考として示した。

今後は、まずは「日本語基礎能力調査」の結果などを活用して定量的に教育効果を測定することが必要であろう。さらに、本学初等教育科教員に対してアンケート調査をするなどして、教員側からみた学生に対する教育効果を明らかにするとともに、「基礎演習」担当教員に対す

るインタビューなどを行い、初等教育科における教育への影響や実施における課題も調査する必要があると考える。初年次教育である「基礎演習」は初等教育科の専門科目を履修する上で基盤となる科目であるため、他の科目への影響という視点からも教育効果を明らかにする必要があると考える。また、「基礎演習」担当教員は9名で構成されている。この9名が共通認識をもって同じ内容で授業を実施する平準化にはさまざまな工夫が必要とされることから、実施に係る課題を明らかにする必要もあるからである。

初年次教育である「基礎演習」は短期大学における2年間の在学期間という短い期間の中で、高度な資格取得のための専門的職業教育を行うための能動的で自律的な学習態度への転換を図る基盤となる教育である。GPAやディプロマポリシーの策定による単位認定の厳格化が求められる昨今において、短期大学における

教育の質保証が必要とされる。その基盤としての初年次教育として「基礎演習」の充実が重要となってくるであろう。

【追記】

なお、「基礎演習」は本稿の共著者以外では、本学初等教育科の次の先生方によって実施された。本稿の研究協力者として、次に記しておく。

野村正則・仲嶺まり子・菅裕子・児玉元治・伊藤佳代子・大塚守

また、「基礎演習」のコンセプトなど「基礎演習」の構想では、本学初等教育科の後藤善友先生に多大なる助言をいただいた。同じく研究協力者として記しておく。

【引用文献】

- 1) 河合塾, 初年次教育でなぜ学生が成長するのかー全国大学調査からみえてきたこと, 2010, 東信堂.
- 2) 友野伸一郎, 対決! 大学の教育力, 2010, 朝日新聞出版.
- 3) 中央教育審議会, 学士課程教育の構築に向けて(答申), 2008.
- 4) 私学高等研究所, 私立大学における一年次教育に関する調査, 2001.
- 5) 国立教育政策研究所, 大学における初年次教育に関する調査, 2007.
- 6) 川島啓二, 初年次教育の諸領域とその広がり, 初年次教育学会誌, 2008, 1, 1, 26-32.
- 7) 仲嶺まり子・徳安敦・後藤善友・山村靖彦・阿部敬信・伊勢慎, 保育士養成校における導入教育の効果的指導についての探究ー養成校における初年次教育の実態調査を中心として, 会報保育士養成, 2011, 69, 21-22.
- 8) 平田祐子, 短期大学における初年次教育の取り組みー国語表現指導の提案, 高田短期大学紀要, 2010, 28, 77-88.
- 9) 佐竹邦子, 短期大学保育者養成学科における初年次教育, 兵庫大学短期大学部研究集録, 2009, 43, 39-48.
- 10) 上田敏丈, 初年次教育の動向ー保育者養成校での実施に向けて, 中国学園紀要, 2009, 8, 101-107.
- 11) 池田孝博・田中麻里・四元博晃, 佐賀短期大学に

- おける初年次教育の取り組みとその評価ー一般教育科目「あすなろう」への学生による授業評価から, 永原学園佐賀短期大学紀要, 2008, 39, 13-18.
- 12) 岸麻衣子・山根明子, 岩国短期大学幼児教育科における基礎ゼミナールに関する実態調査(2), 岩国短期大学紀要, 2007, 36, 43-50.
 - 13) 短期大学コンソーシアム九州, 連携大学の特色ある初年次教育と教養教育の取組み, 2010.
 - 14) 鹿児島大学, 鹿児島はひとつのキャンパスー地域のリーダー養成のための大学連携と総合教育の構築, 2009.
 - 15) 橋本修・福嶋健伸・安部朋世, 大学生のための日本語表現トレーニング スキルアップ編, 2008, 三省堂.
 - 16) 佐藤智明・安保克也・矢島彰, 大学学びのことはじめー初年次教育セミナーワークブック, 2011, ナカニシヤ出版.
 - 17) 佐藤浩章, 大学教員のための授業方法とデザイン, 2010, 玉川大学出版部.
 - 18) 稲垣忠・鈴木克明, 授業設計マニュアルー教師のためのインストラクショナルデザイン, 2011, 北大路書房.